

名波先生と古典への旅

金 学 淳

はじめて名波先生に出会ったとき、先生の清明な声にかなり感動しました。きっちりした発音や大きな声量には、先生よりも若いはずの私でさえも負けてしまう程でした。その先生の迫力ある声で語られる古典文学は、まさに講談師が語っているかのような印象をもちました。近世文学を専門にする私にも、語り文芸の楽しさが感じられる幸運を先生から頂き、読む文学だけではなく、語る文学に非常に魅力を感じました。

中世の平家物語を専門になさっている先生は、中世の軍記物語はもちろん、源氏から江戸後期の小説に至るまで時代やジャンルを超越していました。先生の文学全般に対するすばらしい博識や見識は、江戸文学だけしか考えていなかった私にとっても大きな刺激になりました。特に、私が専攻にしている馬琴の椿説弓春月や南総里見八犬伝を古典文学研究会で先生と一緒に読みながら、中世からの話型や善ではなく悪の方からの観点などを提示して下さったことは、私に大きな論文のテーマを与えてくれるものとなりました。その二作品のうち、留学生として読み取るのがかなり難しかった漢文などを最初の読みから丁寧に教えて下さったことに、感謝しています。また、先生が授業の際に提示された「文学というものは何であるか」という質問は、文学を勉強しているわれわれに大きな刺激になりました。先生は文学とは「永遠の自分への問い」であり、死ぬまで文学の本質に近寄ろうとしなければならないとおっしゃいました。その「永遠の自分への問い」という先生の言葉は、永遠に私の心に残ると思います。

このように先生から頂いた恩を、私はいつまでも忘れられませんし、先生を模範として勉強しなければならないと決心しました。恩師である名波先生のために想い出を書くこと自体が、自分には本当の幸運であると思う反面、先生が退官なさることの悲しさが同時に浮かびます。名波先生から教えて頂いた学問や人生の課題はこれからも私の財産であり、その教えに逆らわないように頑張ることを約束したいと思います。

名波先生、今まで本当にありがとうございました。先生の清明な声を聞けなくなることは非常に悲しいですが、先生の教えと情熱は弟子の心に刻まれ、永遠に世代と国を超えて続いていくと思います。これからも先生のご健康とご活躍をお祈り申し上げます。先生に心から感謝を申し上げます。